研修資料 vol.3

「道徳科指導法」の基礎基本

～道徳科の特質にかなった授業づくりのポイント～

後藤　忠　2023.07.15 一部修正

1　「教材選択」の基礎基本

道徳科の学習は、児童生徒が自己（の心）を見つめ、自己の（人間としての）生き方についての考えを深める学習である。

しかし、心は内面深くにあって外からは見えない。

見えない心を見るためには「鏡」が必要である。つまり、その鏡となるものが「教材」である。児童生徒は教材に自己の心を映し、自己を見つめる。

道徳の教材は児童生徒の心を映し、生き方の糧となるものでなければならない。

⑴ **よい教材**は児童生徒の心を鮮明に映し出す。逆に**よくない教材**は児童生徒の心を何も映さない。よくない教材を使って授業をどんなに工夫してもよい授業にはならない。

⑵ よい教材とは「ねらいに合っている」、「分かりやすい」、「興味関心がもてる」、「臨場感がある」教材のことを言う。教師の心に響き、教師が惚れた教材は間違いなくよい教材と言える。

⑶ 道徳の授業はテクニックで行うものではない。教師の人間性で行うものである。教師が惚れてもいない教材を使って授業をしても授業に力が入らない。だから、児童生徒の心に響かない。
道徳の授業では「よい教材を選ぶこと」が何より一番重要である。教材選択に妥協は許されない。

⑷ よい教材には、ねらいとする**道徳的価値の理解**（価値理解、人間理解、他者理解）を深めるためのエキスがたっぷりと詰まっている。

⑸ よい教材は教師の**目**と**心**と**足**で探す。

⑹ 同名の教材でも、教科書によって内容が異なるので、教師が惚れた方の教材を選択する。

2　「教材提示」の基礎基本

どんなによい教材でも、教材提示がずさんだと教材のよさが児童生徒の心に届かない。

教材提示は、やり直しが利かない **1 回きりの真剣勝負**である。「たった 1 回の教材提示で児童生徒の**完璧な教材理解**を図る」その覚悟で**教材提示に命を懸ける！**

⑴ 児童生徒の心に届く教材提示を工夫する。(ex:臨場感あふれる教材提示、あえて感情を抑えた教材提示、視聴覚機器を利用した教材提示など、教材の内容や持ち味に合った提示の仕方を工夫する)

⑵ 教材提示は「間」が大切である。その「間」の中で、児童生徒は自己の体験に基づき言語（文字）情報を**映像**に変えていく。「間の抜けた」教材提示は児童生徒の教材理解の妨げとなる。

⑶ 教材提示の仕方を事前に何度も練習し、「間」の取り方、その計り方を習得する。

3　（「展開の前段」の）「発問」の基礎基本

⑴ 発問は児童生徒の考えを深める重要な鍵となる。

⑵ 授業では、原則**一人の登場人物**を追い続けるとねらいとする道徳的価値の理解は深まる。その登場人物は、迷い、悩み、失敗し、後悔し、奮起し、などする「揺れる**人間くさい登場人物**(A)」を選ぶことが重要である。すると、児童生徒の人間理解は広がり、深まる。

⑶ 「主な発問（主発問）は**３つ**まで」を基本とする。（中心発問１つ、基本発問２つ）

⑷ 的を射た発問を構成するためには教材分析が不可欠である。（**場面分析**と**内面分析**）

① ＜**場面分析**＞ピンポイントの発問を作るために登場人物(A)の内面（気持ち、思い、考えなど）が**微妙に変化する（動く）ところで、教材文を細かく区切り、分けていく。**（児童生徒にとって**ピンポイントの発問**は考えやすく、話合いもよく噛み合う。）

② ＜**内面分析**＞細かく分けた各場面のＡの内面を多面的、多角的に分析し、すべて書き出す。（すべて書き出しておけば、授業中の児童生徒の発言は全部想定内となり、必要な補助発問の設定や構造的な板書計画に役立つ。）

③ Ａの内面が「**本時のねらい**」に**最も迫る場面**（中心発問場面）を一つ決める。

※一般に「**本時のねらい**」の表現は**抽象的で**分かりにくい。「本時のねらい」を教材の登場人物に重ねて**翻訳する**と中心発問場面が**具体的に**見えてくる。

㊀：はしの上のおおかみ（１年）　Ｂ〔親切、思いやり〕

＜**本時のねらい**＞身近にいる人に温かい気持ちで接し、親切にしようとする気持ちを育てる。

↓

《**翻訳**》（おおかみが）小動物たちに意地悪をするより、温かい気持ちでやさしくする方がずっといい気持ちだ、これからは親切にしようと思う気持ち…。

④ 次に、中心発問で児童生徒が「本時のねらい」に確実に迫ることができるために必要な場面（基本発問場面）を残りの場面から２つ選ぶ。

⑤ 以上の３場面について、②で書き出したＡの内面をさらに分析して、充実する。

⑥ 各３場面の**Ａ**の内面が、児童生徒からすべて引き出せるような**発問**の表現を工夫する。

つまり、❶発問場面を**具体的に**ピンポイントで押さえ、➡　❷分かりやすい言葉で発問する。

発問は教材の「行間」を問う。教材に書いてあることは問わない。（誰が出てきましたか？何と言いましたか？それからどうなりましたか？←NG！）

⑸ **望ましくない（NG な）発問例**

✧ 言葉がよく吟味されていない（分かりにくい、考えにくい）発問

✧ 発問の意図がよく分からない発問

✧ 本時のねらいや指導内容に沿っていない発問

✧ どこの、何を問われているか分からない発問

✧ 発達の段階や個人差を考えていない発問

✧ 「なぜ、どうして」など理由を問う発問（児童生徒の思考を**答え探し**に導く）

✧ 「もし、あなただったらどうするか…」という発問（教材を使って自己を見つめる学習の特質を損ねてしまう）

✧ 補助発問が用意されていないもの

4　「話し合い活動」の基礎基本

⑴ 「話し合い活動」は**「聴き合い活動」**である。話合い活動の効果は聴き手のリアクションにある。

⑵ 日頃から聴き方の指導を充実する。（人の話は目と耳と心で**聴く**。話し上手より**聴き上手**になる！）

⑶ 座席の形は固定せず、それぞれの学習活動にふさわしい形に変化させる。例えば、

✧　みんなで話し合うときはコの字形。（顔が見える、板書が見える）

✧　グループで話し合うときはＴ字形。（対面より圧迫感がない）

※　その他、「教材提示のとき」、「自己を見つめる学習のとき」、「書く活動のとき」など、それぞれの学習の目的に適した座席にする。

⑷ 話し合い活動を通して、児童生徒は、

✧ 自分の考えの曖昧さに気付く

✧ 自分の考えがはっきりする

✧ 自分の考えと他の人の考えの違いが分かる

✧ 自分の考えが強まる

✧ 自分の考えが変化する⇐（これはめったに起きないので期待しない）

⑸ 一人一人の児童生徒が自分の考えをもって話し合いに参加できるように配慮する。

✧ 一人一人が自分の考えをもつまでの時間は異なる。その時間を十分に確保する。（考え中に話し合い活動が始まると授業について行けない子が出てくる。特に、第１発問の話し合い開始のタイミングが重要）

✧ 挙手した子供をすぐ指名するのは最も NG！

✧ 第１発問の第１発言者を予め決めておくとよい。（意図的指名）

⑹ 「話し手は聴き手の方を向いて話す、聴き手は話し手を見て聴く」指導を徹底する。

⑺ 教師の立ち位置には留意する。（常に話し手の対角に移動し、児童生徒の声を傾聴する）

5　「書く活動」の基礎基本

子供の思考は話し合うことによって広がり、書くことによって深まる。

⑴ 書く活動は（原則）１授業に１度だけ。（書く活動は時間がかかる）

⑵ 書く時間は、最短でも５分は必要。（８分あれば理想的）

⑶ ワークシートの大きさは、書くことに困り感をもっている子に合わせる。（できるだけ小さ目がよい）

6　「板書」の基礎基本

板書は、学習指導過程に沿って子供の思考や発言を分類整理し、ねらいに迫るように構造的にまとめ上げていくものである。（子供の発言を単に右から左へ書くだけの板書は NG）

⑴ 発言はキーワードで板書する。（長い文では黒板が雑然となり、分かりにくい。）

⑵ 板書計画を立案する際には、上記 **3「発問」の基礎基本　⑷の⑤**の内面分析を活用する。

☆　**板書は、授業前にすでに完成されているものであると言える。**

7　道徳科授業に臨む「教師の姿勢」の基礎基本

⑴　教師も人間として発展途上中、子供とともに自らも高まろうとする気持ちで授業に臨む。
⑵　子供の発言を受容的に、共感的に、肯定的に、**待つ、聴く、受け止める。**
⑶　子供とともに考える。
⑷　子供の考えを整理する。（板書などで）
⑸　子供の考えを広げる。
⑹　子供の考えを深める。
⑺　子供の学習を支援する。
⑻　子供に**学ぶ**。

※　以上、主に「展開の前段」での指導のポイントを中心に述べたが、その他、「主題名の付け方」、「『本時のねらい』の立て方」、「主題設定の理由の書き方」、「導入、展開の後段、終末の指導のポイント」、「指導上の留意点に書くべき内容」、「評価」などについては、

Ａ　道徳科学習指導案作成超×３ 入門

に詳しく載せているので、是非参考にして授業づくりをしていただきたい。

最重要課題

「主題」を徹底的に意識して授業を作る！

道徳科の**主題**は「ねらいとする道徳的価値（**内容項目**）」と、それを達成するための「**教材**」によって構成される。
その主題を子供にも分かるように端的に表したのが**主題名**である。

「ねらいとする道徳的価値（内容項目）」は、それ自体抽象的で漠然としたものである。
それを**具体的に**するのが**教材**である。つまり、教材によって具体的な指導内容や指導の方向が決まる。
例えば、「泣いた赤おに」と「絵はがきと切手」は、共に小学校中学年のB〔友情、信頼〕の教材であるが、それぞれの主題は全く異なる。前者は「大切な友達」についての教材であり、後者は「友達を信じる」ことについての教材である。

道徳科の授業では、この「**主題**」を徹底的に意識することが重要である。
「本時のねらい」を始め、「主題設定の理由」、「導入」、「展開の前段」、「展開の後段」、「終末」、「評価」のすべてにおいて一貫して「本時の主題」から外れないように留意して学習指導案を作成し、授業に臨むことが大切である。

そうすると、終始一貫性のある**ぶれない道徳授業**になる。